

違いは人を分断しない 言葉は通じるか

令和5年9月1日 浅賀

おはようございます。本校北側の、5ハウス、6ハウスから望める田んぼも徐々に黄金色になってきました。「実るほど首を垂れる稲穂かな」とは、名言です。諸君も日に日に大きく実っていくその只中にあるわけで、今日から始業する2学期の、12月までの4か月の間にも、学業に、進路に、部活動に、人間関係に、諸君が大きく大きく実るのが、楽しみです。

暑い日が続いています。猛暑、酷暑を超えて今年は災害級の暑さという表現を耳にするようになりました。世界中で山火事が発生し、ワイドショーのコメンテーターは「この暑さがニューノーマルになり、毎年『去年より暑い』という状況が続く」と発言。国連のグテーレス事務総長は地球温暖化から地球沸騰化へシフトしたと危機感を訴えました。

さて諸君、この先毎年、本当にますます暑くなるのでしょうか？もしかしたらワイドショーもグテーレス事務総長も根拠がなく発言して、私たちは煽られているのではないのでしょうか？どう思いますか。このような思考、判断、表現する能力はますます求められています。福島処理水の海洋放出に対する世界中の反応を見ても、思考、判断、表現する能力がいかに重要か、よくわかるはずです。

では、どうすれば能力が身につくか、そのキーワードは批判的思考 *Critical Thinking* です。批判的思考は、ただ単に批判をすればよいのではない。私は批判的思考 *Critical Thinking* とは *Evidence Based* と同義であると思います。つまり明確な根拠に基づいて判断する。そのためには根拠を探し求め、さらに思考を重ねることが必要なのです。根拠が示せなければ、それはもう直感だけのクイズと同じで、当たりかハズレかのレベルに甘んじてしまうのです。

今日諸君に示したいのは、映画『ボストン市庁舎』についてです。これは「米国ボストン市の行政の取り組みが延々と描かれるドキュメンタリー作品。ナレーションもテロップもなく、特段のストーリーも感情を揺さぶられるような音楽もない。しかし見始めた途端に引き込まれ、見終わったあとには何か刺激的な高揚感と感動が残るリーダー必見の一作」と、ある新聞の映画評にありました。しかし上映時間が4時間半を超え、私はこの映画評のみでまだ見てはいません。映画評から、諸君と共有したい点を引用します。

ボストン市は課題のるつぼ。移民や人種、障害者や高齢者、貧困層への住居や食糧の供給、薬物依存や銃規制など問題は多岐にわたる。カメラは行政担当者や市民との会合や対話の場面を追う。市長在任の5年間で、ボストン市の失業率が大幅に減少し、ダイナミックで民主的な市に変容したことが最後の市長の言葉で述べられるが、多様な問題に対する市長と市の職員の取り組み自体がテーマである。

移民の町ボストンの問題の背景には多様性がある。一つの方策に対して必ず別な意見があり、解決は一筋縄ではいかない。そんな状況を描くどの場面でも、市民は誰もが自分の意志で現実を語り要求を伝える。そうした市民の声を尊重しながら、市職員はよりよい生活の実現を目指すことこそが行政の使命との自覚をもって語り行動する。

筆頭は繰り返し登場して市民に語り掛けるマーティン・ウォルシュ市長（現アメリカ合衆国労働長官）である。自身が移民出身者であり、アルコール依存者だったことを隠さず、常に自らの経験や考えを前面に出して、揺るぎないメッセージを市民に伝え続ける。そんなリーダーの意向の下に、市職員も同じように自分の言葉で課題を語り、問題の所在を常に具体的に示しながら、改善策を市民に問いかけていく。

本作は市長のスピーチで結ばれる。

「違いは人を分断しない。力を合せば何でもできる。それが民主主義であり私たちの市政の基本。全ての声を聞き、たとえ心地よくなくても新しい声に耳を傾ける。率直に話をする事でよりよい解決が実現する」

その演説に続くエンドロールには、市民からの電話対応の声が続いて、どんなささいな電話にも丁寧に対応する市政の営みを伝えて幕が閉じる。

描かれた問題の多くが、わが国でこれから起こりうることを考えると、本作は予言的であり、そして預言的でもある。

令和5年1月23日付け日本教育新聞

いかがですか。交渉相手と利害が対立した時、立場や意見が一致しないとき、諸君はどうしますか。本校は明日からいなほ祭（学園祭）ですが、クラスや部活動などでどうやって話し合いましたか？強引に押し切る人はいませんでしたか？

ボストン市の職員のみならず、ビジネスマンが商談を成立させるにも、外交官が対立する相手国と交渉して戦争回避に尽力するにも、あらゆる交渉において私たちは、誰かとの間に利害や意見の対立が生じることを、どうしても避けられません。そして対立したら、双方にとってのギリギリの妥協点を模索するしかない。ですから考えられるあらゆる観点から議論を尽くす必要がある。強そうな人や怖い人に押し切られて、忖度・妥協するのはいけません。少数意見や小さな声をなめてかかって、切り捨てるのは人道に悖る恥ずべき行為であり、傾聴が不可欠。そうやって議論を尽くして、多様な立場の人にとってギリギリの妥協点、着地点を模索する。それが民主主義なのだと気づかされます。

ですから民主主義というのは、実にまどろっこしいとも言えます。議論には時間がかかるし、膨大な知識量と思考力と情熱が必要です。SNSを見ると、たとえば処理水海洋放出に対する一部外国人の書き込みだって、それに反論する一部日本人の書き込みだって、どちらも短絡的で、一方的に相手を責める論調で、相手の言い分に耳を傾ける寛容が微塵も感じられず、分断はこうして、ますます拍車をかけて進むのだと思うと嘆かわしい限りです。

旧約聖書の『バベルの塔』は、諸君もよく知っている物語です。おさらいしましょう。

旧約聖書『創世記』に出てくる物語。大洪水のあと、ノアの子孫たちは東方のシナルの平野に移り住んだとき、天に達するような高い塔を建設しようと企てた。ヤハウェはこれを知って怒り、人間の言葉を混乱させて互に通じないようにし、その企てを阻んだ。そのためノアの子孫たちは工事を中止し、各地に散ったという。コトバンク『バベルの塔とは』、goo辞書『バベルの塔』より要約

私たちはノアの子孫ですから、言葉をバラバラにされて、日本語や英語などに分かれたこととなります。バベルの塔がなかったら受験科目が1科目減っていたかもしれません。

私は数学の教師ですから、ここで対偶をとってみたいと思います。すなわち、

言葉をバラバラにした ⇒ 天に達する高い塔を建設できなくなった の対偶は、
天に達する高い塔を建設できた ⇒ それは言葉が通じ合ったから となる。

諸君もすでに気づいているとおり、言葉が通じるか否かは、別に英語やロシア語だからではなく「同じ日本語を話す者どうしても、分かり合えないことが起きるよ。そうすると協力して何かを作ることができなくなるよ」いう分断のメタファーなのです。

諸君は、クラスの全員と言葉が通じますか。まさか話しかけたことのない人がクラスにいるなんてことはありませんよね。先生とは言葉が通じますか。初対面の怖そうなおニイさんとも言葉が通じて、その結果わかりあえる自信はありますか。これらすべてにイエスなら、あなたはボストン市の職員に採用される可能性が大了。

聖徳太子は1500年前「和を以て貴しとなす」といいました。和とは何でしょうか。とことん究めるに値するテーマですよ。

聖徳太子のさらに1000年前、孔子は「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」といいました。さて、和に加え、同とは何でしょうか。これも一生かけて究めるテーマ、究めれば知識は知恵に発展するのです。論語の現代語訳には「立派な人は誰とも仲良くするが、安易に同調はしない」とありました。同調することと仲良くすることは別だということになります。さらに、意見が対立しても言葉さえ通じれば、友情は成り立つとも言えます。ボストン市の成熟した在り方と同じです。

私たちが今日享受している豊かさ、平和を築くのに、先人はいかに努力したのでしょうか。私たちがそれを受け継ぎ、次世代へ引き継ぐためには何をすればよいのでしょうか。傍から見て「分断されてるなあ」と思われることのないような努力工夫は、せめてしてほしい。伊奈学生ならさらに、天にも届く、神をも凌駕するような塔を築き上げてほしいものです。